むすび塾

「自分は大丈夫」大敵

津波への意識に個人差

巡回ワークショップ　@神奈川・横須賀市長井地区

東日本大震災の教訓を地域の備えに生かすため、河北新報社は3月16日、巡回ワークショップ「むすび塾」を神奈川県横須賀市の長井地区で開いた。通算30回目で、東北以外での開催は9回目。減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長を進行役に、長井連合町内会防災対策会議のメンバー13人が、地域の津波対策や避難所運営について意見を交わした。震災を経験した宮城県の2人も「語り部」として参加した。

東日本大震災の教訓を地域の備えに生かそうと、意見を出し合った。地域は相模湾に面し、海の近くの平地に住宅が集まっている

長井地区は三浦半島の西側に位置し、相模湾に面する。市のハザードマップによると、大地震で3尺の津波が発生した場合、ほとんどの住宅が浸水被害を受けると予想されている。しかし、

たりしている。

「津波警報が出ているのに『自分は大丈夫』と逃げない人がいた」と被災した小高誠市長井支所長（45）と、震災発生時に最大1200人が避難した東一番小（仙台市青葉区）の元校長今野英二さん（63）が、当時を振り返った。

「津波警報が出ているのに『自分は大丈夫』と逃げない人がいる」と話した。

「住民以外の人が、避難所ではいることに自分から不安を感じている。「今日の津波は来ない」と話して、被災時には避難所として使われる。ただ、施設に接続できる道は狭く、持ち出し袋についてはどうなるかが、他人任せの状況になっている」と助言した。

海の近くに住宅がある地区の高台には、150台収容の駐車場を備える農業体験施設があり、被災時には避難所として使われる。ただ、施設に接続できる道は狭く、持ち出し袋についてはどうなるかが、他人任せの状況になっている」と助言した。

「水が入ると重く、迅速な避難の妨げになるのではないか」との疑問も出た。木村理事長は、町内会で高台に倉庫を借りて共同保管する事例を紹介したほか、内閣府の親戚宅に最低限の備蓄品を預けることを提案した。

白井幸江さん（64）は、同居する義母が「ここまで津波は来ない」と話したり、被災時には避難所として使われる。ただ、施設に接続できる道は狭く、持ち出し袋についてはどうなるかが、他人任せの状況になっている」と助言した。

「今日の「水が入ると重く、迅速な避難の妨げになるのではないか」との疑問も出た。木村理事長は、町内会で高台に倉庫を借りて共同保管する事例を紹介したほか、内閣府の親戚宅に最低限の備蓄品を預けることを提案した。

長井地区社会福祉推進委員協議会長・龍崎定夫さん（67）

【災害への備え】日頃から住民同士が顔見知りになっておくことが大切だ。震災後、交流のきっかけにしてもらおうと、高齢者を対象にしたサロンを開いている。

＝長井地区社会福祉推進委員協議会長・龍崎定夫さん（67）

【災害への備え】減災マニュアルを作って各戸に配り、緊急時の高台への避難を呼び掛けている。被災時の役割分担や日頃からのご近所付き合いの大切さも強調している。

＝東町内会長・福本三千治さん（71）

【震災時の経験】経営する医院の目の前に海がある。震災当日は長井でも津波警報が出ており、避難を呼び掛けたが、患者は避難しなかった。大きな地震が起きた時も逃げないのではないか、と心配している。

＝医師・小川伸郎さん（57）

【緊急時の不安】横須賀市は要援護者名簿を町内会長や民生委員に配布しているが、掲載されていない人も多いようだ。いざという時に大丈夫か、心配になる。

＝長井地区民生委員委員協議会長・白井幸江さん（64）

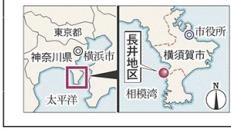
【震災時の経験】長井も大きく揺れた。関東大震災が起きたと思った。周囲の人に避難を呼び掛け、近所の足の悪い人を連れて八幡宮まで歩いた。

＝長井地区消防協力会長・松岡和行さん（57）

【参加して】自宅は高台にあり、津波にあまり関心がなかったが、小高さんの映像を見て危機感を持った。語り部の話を、近所や知り合いにも伝え、地域の危機意識を高めたい。

＝長井連合町内会役員・穐本春夫さん（71）

相模湾近くの平野部に住宅集まる



神奈川県横須賀市長井地区は三浦半島の西側に位置し、相模湾に面する。標高100～200㍍の起伏のある丘陵や山地が海に迫り、風景はリアス式海岸に似ている。黒潮の影響で一年を通じて温暖な土地に約3000世帯、約9000人が暮らす。

農業と漁業が盛んで、農産物はキャベツ、ダイコン、イチゴ、海産物はサザエ、ワカメ、イカが特産になっている。

地区内には農業体験ができる総合公園「ソレイユの丘」や、自衛隊の関連施設がある。過去に大きな津波の被害は受けた記録はない。住宅は海の近くの平野部に集まる。